

行事によせて

―人間の生活と祭り―

本田 和子

秋は、行事の多い季節である。

出である。

青い空に紅白の玉がとびかう。玉入れのかごはとても高くて、空にとどきそうだ。だから、力いっぱい投げ上げても、なかなか、かごには入らない。でも、最後に一つ、「ピーッ」と笛が鳴った瞬間に投げ上げた赤い玉が、ぬけるように青い秋の空を背景にして、吸い込まれるようにかごの中に入っていった。

はじめての運動会の、美しい思い

現在の幼稚園で、行事はしばしば保育の癌がんとされている。行事が近づく、保育者も子どもも準備に忙殺される。保育者は子どものことを考えるゆとりを失い、子どもは自分の遊びをたっぷり遊ぶ時間を失う。「行事さえなかったら」という若い保育者の嘆きの声が聞こえてくる季節である。

幼稚園の行事が、現状ではさまざまな問題をはらんでいることは確かである。保育者にとっても子どもにとっても、「あわただしく、苦しい」スケジュールである。

それならば、行事を全廃してしまつてはどうだろうか。毎日の生活の充実だけをひたすら心掛けて、「運動会」も「遠足」も、「お餅つき」も、みんな幼稚園から追放してみては？

しかし、この提案に対しては、多くの保育者が首をかしげる。「でも、やはり……」

行事には、完全に追放しきれない「何か」があるようだ。

◆ ◆ ◆ 私どもの先祖たちは、生活の要所要所に行事を置いて、時間に区切り

をつけ、生き方にリズムをつけてきた。豊作を祈念して春は田の神を祭り、先祖の霊を招いて夏は迎え火をたいた。秋には、収穫を祝って鎮守の森にたいこが鳴りひびき、新しい年を迎えるために、人々は冬の住居をきよめた。

農作業の区切りごとに神祭りが行なわれ、人々は、その日は労働から解放されて、思いっきり祭りを楽しんだ。祭りは、きびしい労働の日々の中に挿入された「ハレの日（特別な日）」だったのである。

人々は、日常の汗にまみれた労働の過程をつき破り、平常は味わえないものを口にし、毎日の生活とは異なる特別の行動をする。しかも、部落の全員で、特別の日をすごすのである。

ロジェ・カイヨワは次のように言う。「祭りにおいては、祭りと祭りの間の長い合間に蓄積した財貨が蕩尽され、ルールの欠除がルールとなり、あらゆる規範が仮面の存在の伝播によって覆えされる。こうしたすべてのことから、共に眩暈を感じることが、集団生活の絶頂となり、紐帯となる」。

人々は、一場に会して神酒を飲み、みこしをもんだ。火を囲んで舞ったり、拍手して熱狂したりした。鎮守の社は、共同体のシンボルである。

一つの神の氏子であることで、人々は分散孤立して行なわれる農作業の孤独から解放され、祭りにおいて共同性を確かめ合った。

祭りの場で、個々人を縛っていた

日常的な約束や秩序は影を潜める。あらゆるタブーが力を失って、「聖と俗」の境界すらとり去られ、人々は、神とすら交流し得る時をもつ。人々は、祭りの庭で、「存在の多義的可能性」を生きることができた。



現代の私どもは、現実的・常識的な束縛にみちみちた日常性のきずなに、がんじがらめにされて、身動きできない。子どもの遊びですら、あまりにも現実的・常識的であって、想像と創造に乏しいのである。

「よく遊んでいるのだが、何かしら迫力がない。ムンムンするような熱気が感じられず、何ともいえず物足りない」と、最近の子どもの遊びを評するベテラン保育者の言は、傾聴に価するものであろう。

子どもたちは、遊びの世界で狂気

乱舞することなく、日常性から脱却できないままに、常識的な行動の規準や価値を、そのまま遊びの世界にもち込んでいるようだ。子どもの遊びにおいて実現されるべき「存在の多義的可能性を生きる」という特権を、子ども自らも放棄してしまい、また大人自らも、気付かずしてそれを奪ってしまっているように思われる。

このような日常性を打ち破る手段として、行事を考えてみてはどうだろうか。

幼稚園の行事を、「ハレの日」として位置づけるのである。

楽しみに期待して「待ち」、「いつもと全くちがった一日を、思いっきり楽しむ」それだけでよいのではないか。

行事を経験することによって、「何がねらえるか」「あるいは、「どんな教育効果があるか」などと、いわゆる「教育的」なことがらを近視眼的に考えることをやめて、保育者にも子どもにも「徹底して楽しい一日」とするのである。

祭りの準備に忙しいのは大人である。子どもたちは、あわただしい母親の動きや、かすかに聞こえてくる祭り囃子の練習を耳にしながら、ただ、胸をときめかせて「待った」そして、訪れた祭りの一日を、「興奮し、熱狂して」すごした。

「胸のときめき」と「みんなで熱狂する時間」を、いかにして作り出すかだけが、保育者の課題とはいえないだろうか。

幼児の教育第七十二巻第十一号

十一月号 定価一二〇円

昭和四十八年 十月二十五日印刷
昭和四十八年十一月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ二一

印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします